

北河内地方における二人称としての「自分」の使用について

東南アジア課程ビルマ語専攻4年 松木康
人称代名詞・二人称・自分・社会言語学・大阪府北河内地方

0. はじめに

『日本国語大辞典』(第二版第六卷)(2001)によると、自分という単語に関しては以下のように記述されている。

- 一. その人自身。自己。自身。
- 二. 自称。わたくし。多く、男性が改まったときに使う。また、もと日本の軍隊で、自称に用いられた。
- 三. 対称。「御自分」「御自分様」の形で用いられた。

- (1) 三の用法は中世末武士詞の「御自分」や「貴様」に代用する「御自分様」に見られ、「自分」に「御」がつくかどうかで二人称と一人称とに使い分けられていた。
- (2) 現在、大阪方言などに見られる二人称用法は、友人関係もしくは同世代と認識した場合、男女ともに、相手が同性なのか異性なのかを問わずに使用する。この場合の特徴としては、会話語であることと、使用者には一人称としての「自分」の使用がないという点である。

『日本国語大辞典』(第二版第六卷)(2001:985-986)より引用。下線は筆者による。

また、『日本方言大辞典』(上巻)(1989)によると、「自分」とは、「(代)対称。お前。」(『日本方言大辞典』(上巻)(1989:1107)より引用。下線は筆者による。)と示されており、またその使用地域は、千葉県、新潟県上越市、三重県伊賀、大阪府、大分県宇佐郡とされている。¹

このように、本来一人称、ないし再帰代名詞と呼ばれる「自分」という単語を二人称として用いる用法は、筆者の出身地である大阪府北河内地方²にも見られる現象である。本稿では、この二人称としての「自分」の使用について、使用条件を含めた、社会言語学的考察を行い、先行研究を見た上で筆者による現地調査のデータを通して明らかにしていくことを目的とする。なお、本文中に出てくる例文番号は筆者による。

なおここで、今回対象とする「自分」の用法は、関東地方に見られる用法、例えば井上・鐘水(2002)の『辞典 新しい日本語』の「ジブン」の項目においての、

- (1) 自分だってそのほうがいいって言ったじゃん! 井上・鐘水(2002)

の例文のようなものとは異なるものであるということをあらかじめ断っておく。この関東地方における用法について、村崎(1975)は、「自分」という語は代名詞であるとした上で、「自分」は、他の人称代名詞とはちがって、直接発話の中でただ一回しか出て来ない対象

¹ 「自分」の項目についてはこの記述しかなく、他の記述は見られなかった。

² 北河内地方とは、筆者の出身地である大阪府枚方市を含む、大阪府北東部の7市の総称であり、具体的には、枚方市、寝屋川市、交野市、門真市、守口市、大東市、四条畷市を指す。西側には淀川を臨み、京阪間のベッドタウンとして栄えている。淀川は大阪府民全体の水源であり、かなり大きな川でもあることから、淀川を境に言語感覚も多少異なってくる。

には用いることができないということが出来る。」と述べている。すなわち、

(2) あなたはつまらなさそうにそれを聞いています。 村崎 (1975)

という文においては、あなたの代わりに「自分」を用いることはできない。³

つまり、関東地方においては、相手の発話を前提として、その返答として相手の立場に立って「自分」という言葉を使用することができる。しかし、今回対象とする、北河内地方における二人称としての「自分」の用法は、

(3) 自分、漫才好き？ 筆者による作例

の例文に現れるように、特に相手の発話を必要とせず、標準語でそのまま「きみ」や「あなた」と置き換えることのできる用法である。

1. 先行研究

郡 (1997) は、大阪弁において意味がずれる語や表現の例として「自分」という語を取り上げている。

(4) 「ジブン チョット コエタンチャウ」(あなた、ちょっと太ったんじゃない?)

郡 (1997) はこの用法に関しては、Q調査⁴によると、この「自分」という語の使用は、①地域差、②聞き手と話し手との関係、③世代差、④男女差の4つの要因によるものであるとしている。以下は郡 (1997) より一部改変したものである。

①地域差に関しては、「自分」という言い方を二人称で用いるのは東海道線沿線全域で見られるが、特に近畿圏ではその傾向が濃くなっているとしている。②聞き手と話し手との関係に関しては、親しい友人との間柄において、「自分」を二人称で使う傾向があるとしている。③世代差に関しては、「自分」という言い方は、若年層で見られる新しい言い方であるが、大学生での使用が特に目立つとしている。④男女差に関しては、「自分」という言い方は、女性よりも男性に多く使用されているとしている。

2. 問題設定

郡 (1997) から読み取れる問題点は以下の2点に集約される。

- ・「自分」という言い方に関して、4つの視点からの言語の格差の要因を述べているが、郡 (1997) はその論の根拠としての調査結果を示してはいない。
- ・②に関して、「親しい友人の間柄」という若干曖昧な表現になっているため、その内容が不十分である。

したがって、郡が述べる言語格差の要因を裏付けるデータを収集し、なおかつ「親しい友人の間柄」でも、聞き手と話し手との関係について場面差を設定する必要がある。なお、この場面差は4の調査前の仮説の章で後述する。

3. 研究方法

筆者がアンケートを作成し、北河内地域在住のコンサルタントにご協力いただく。なお、

³ 村崎 (1975) は、この例文は方言による「自分」の二人称用法の場合は除くとしている。

⁴ 詳しくは、井上 (1991) を参照されたい。

アンケートにおける例文については、それらが筆者の独断に陥らないよう、一人の友人にご協力いただき一緒に作成することによって、できるだけ客観的な文章を作ることができるよう努めた。

調査については、協力者とともに、「自分」の二人称使用の調査に関して、聞き手と話し手の関係を3種類考え、その場合の例文を考えた。なお、今回対象としたのは、①若年層男性、②若年層女性、③老年層男性、④老年層女性の4種類に分類される方たちである。なお、今回の調査では、男女ともに若年層は20歳～25歳、老年層は55歳～65歳までを対象とした。この4種類のコンサルタントの調査を通して、社会言語学的視点から、男女差、世代差による違いも検討する。

表1: 今回対象としたコンサルタントの年齢層・出身・性別データ⁵

	若年層		老年層	
	男	女	男	女
枚方	14	5	8	7
寝屋川	43	6	1	3
交野	9	2	1	0
門真	25	3	1	2
守口	11	4	0	1
大東	4	1	0	0
四条畷	1	0	0	0
合計	107	21	11	13

4. 調査前の仮説

調査に入るにあたり、なぜこのような状況を設定したのか、またどのような答えを期待しているのかを含めて、以下に仮説を提示する。郡の考察を見た上での筆者の内省によると、二人称として「自分」を用いるか否かは、①社会的身分（目上、目下の関係）、②話し手の心理状況、③社会的身分が同等であった場合の話し手が感じる聞き手との距離感（初対面、異性、同性、好感、嫌悪）の3点によって左右される。また、各項目以下に実際に使用したアンケートの質問項目を表示する。

4.1 上下関係（アンケートの例文A、Bに対応）

筆者の内省によると、「自分」という単語はかなりフランクに使われる。そのため、親しい友人の間柄ではもちろんこと、目下には使えると思われる。しかし、目上には、失礼にあたると思われるので、使えないのではないかと考えた。

(A)「自分、最近東京行ったんやって？」

1. 部活動や学校の後輩、会社の部下など目下の人に対して（する・しない）

⁵他地域からの方言の流出による混乱を避けるため、生まれてからこれまで北河内地方に居住している人とした。ただし、老年層においては、この条件下ではコンサルタントが皆無になってしまうため、一般的に言語形成期と呼ばれる、生まれてから13歳までをこの地域で過ごし、かつ現在この地域に居住している人を対象とした。

2. 部活動や学校の先輩、会社の上司など目上の人に対して (する・しない)
(B)「自分、最近東京行きはったんですって？」
1. 部活動や学校の後輩、会社の部下など目下の人に対して (する・しない)
2. 部活動や学校の先輩、会社の上司など目上の人に対して (する・しない)

4.2 家族内において(アンケートの例文C, D, E, Fに対応)

以下に示す4つの例文は、順に、喜び、怒り、悲しみ、楽しみを表現している文であり、話し手の心理状態によって家族でも「自分」が使用されるか否かを調査する。また、家族内でも年下と年上では違いはないかも検証する。基本的には家族に対し「自分」は使用せず、呼称で呼ぶのがほとんどであると思われるが、怒りの感情を含む際、まれに使うことがあると筆者は推測する。

(C)「自分、ほんまよかったなあ」

1. 両親に対して (する・しない)
2. 上の兄弟に対して (する・しない)
3. 下の兄弟に対して (する・しない)

(D)「自分、何さらしとんねん!!しばくぞ!」

1. 両親に対して (する・しない)
2. 上の兄弟に対して (する・しない)
3. 下の兄弟に対して (する・しない)

(E)「自分、ほんまもう何してんねんって・・・」

1. 両親に対して (する・しない)
2. 上の兄弟に対して (する・しない)
3. 下の兄弟に対して (する・しない)

(F)「自分がおってくれて、おれほんまよかったわー」

1. 両親に対して (する・しない)
2. 上の兄弟に対して (する・しない)
3. 下の兄弟に対して (する・しない)

4.3 聞き手との親密度(アンケートの例文Gに対応)

話し手が感じる聞き手との距離感次第で使用に差はないかということを検証する。以下に述べる(a)から(e)の5つの状況に照らして考えてみることにした。

(G)「自分漫才好き？」

1. 初対面の人に対して (する・しない)
2. 好感を持っている異性に対して (する・しない)
3. 好感を持っている同性に対して (する・しない)
4. 嫌悪感を持っている異性に対して (する・しない)
5. 嫌悪感を持っている同性に対して (する・しない)

(a) 初対面の場合

人にもよるが、初対面の人は名前でなかなか呼びにくいので、「自分」を使うことがあるのではないかと。また、名前を聞いてもすぐに忘れてしまった場合、聞き返すのが失礼だと感じる場合は、「自分」という言葉で代用することもあるのではないかと。

(b) 相手に好意を持っている場合（異性として）

親しい友人には「自分」を使うということになってはいるが、好意を持っている異性に対しては「自分」とは呼ばず、あえて名前で呼ぶのではないかと。この仮説は筆者が呼ばれるとき、「自分」よりも名前ないしニックネームで呼ばれたほうが親しみを得ると思うことから考えた。

(c) 相手に好意を持っている場合（同性として）

先行研究と筆者の内省に照らしてみても、ここはかなりの確率で「自分」の使用が見られると思われる。しかし、親しい友人同士で「自分」という単語を本当に使うかを確認したい。

(d) 相手を嫌っている場合（異性として）

(b) でも述べたように、「自分」よりも名前で呼ばれたほうが親しみは感じやすいと筆者は考える。すると、異性でも嫌っている異性に対しては、あえて名前で呼ばず「自分」と使うことがあるのではないだろうか。

(e) 相手を嫌っている場合（同性として）

同年代であっても嫌っている同性に対しては、「自分」という単語は使うか。ここも (d) と同様に、親しみを感ぜさせないという意図から、あえて「自分」という単語を使うのではないだろうか。

5. 調査結果

以下の表に結果を示しながら、⁶順に若年層男性、若年層女性、老年層男性、老年層女性と見ていき、各データについて考察を述べる。

5.1 上下関係について

			若年層男性	若年層女性	老年層男性	老年層女性
(A)	1 (目下)	可	102	15	9	10
		不可	5	6	12	3
	2 (目上)	可	0	0	0	1
		不可	107	19	10	10
(B)	1 (目下)	可	56	12	7	7
		不可	47	9	4	6
	2 (目上)	可	4	3	3	2
		不可	103	18	8	11

<若年層男性>

⁶ 「自分」の項目以外の点で使用不可としている人は有効回答からはずした。

予想通りの傾向が表れる結果となった。

<若年層女性>

(A) の 1 の目下に対する使用について、若年層男性が約 95 パーセントの使用があるのに対し、若年層女性は約 71 パーセントにとどまっている。やはり、女性よりも男性に使用の傾向がある。

<老年層男性>

若年層男性における傾向とほぼ似た形になり、同性における年齢差はあまり見られない。

<老年層女性>

他の 3 種類のコンサルタントと傾向は変わらない。二人称としての「自分」は、目下には使え、目上には使えないということは、年齢、性別を問わないようである。

5.2 家族内において

			若年層男性	若年層女性	老年層男性	老年層女性
(C)	1	可	11	3	1	0
		不可	96	18	10	13
	2	可	7	5	2	0
		不可	100	16	9	13
	3	可	6	6	4	1
		不可	101	15	7	12
(D)	1	可	21	10	0	1
		不可	86	11	11	12
	2	可	12	12	0	1
		不可	95	9	11	12
	3	可	12	9	2	5
		不可	95	12	9	8
(E)	1	可	13	5	3	2
		不可	94	16	8	11
	2	可	9	5	4	3
		不可	98	16	7	10
	3	可	3	3	2	3
		不可	104	18	9	10
(F)	1	可	6	8	2	1
		不可	101	13	9	12
	2	可	6	9	2	2
		不可	101	12	9	11
	3	可	3	10	4	5
		不可	98	11	7	18

<若年層男性>

大方予想通りの結果となったが、(D) の怒りを含んだ使用の箇所が予想を下回った。これは「自分」よりも、相手の呼称やもしくは「お前」を使うことが多いためだった。

<若年層女性>

(D) の怒りを含んだ使用の箇所がほぼ半々な割合になり、特に、2すなわち上の兄弟に対する「自分」の使用は、不可を超えている。これは、若年層男性の場合には、「自分」

よりも、相手の呼称やもしくは「お前」を使うことが多かったが、女性になると、呼称はもちろん用いるが、「お前」という単語をあまり使わないということが影響している。

<老年層男性>

目をひくのは (D) の 1 と 2 の部分である。若年層では、怒りを含んだ感情をもって発言する場合は、「自分」という単語を使うことが若干多かったが、老年層においては自分より身分が年上の人に対しては、たとえ家族内であっても使用を控えるという傾向が見られた。

<老年層女性>

傾向としては他の 3 種類のコンサルタントと変わらないが、全体のパーセンテージとして、他の 3 種類と比べて使用が少ない。これも老年層男性と同様、家族に対しては、あまり「自分」という単語自体使わないという声があった。

5.3 聞き手との親密度

			若年層男性	若年層女性	老年層男性	老年層女性
(G)	1 (初対面)	可	79	15	9	10
		不可	21	6	2	3
	(好感：異性)	可	83	13	4	6
		不可	20	8	7	7
	(好感：同性)	可	100	16	7	9
		不可	7	5	4	4
	(嫌悪：異性)	可	54	16	7	7
		不可	53	5	4	6
	(嫌悪：同性)	可	48	15	7	7
		不可	52	6	4	6

<若年層男性>

大方予想通りになった。1 の初対面に関しては仮説どおりの結果となった。つまり、恥ずかしがってあえて名前では呼ばないというケースもあったが、聞いたのにすぐ忘れてしまって、聞き返すのが失礼なため「自分」を代用したというケースもあった。⁷

<若年層女性>

傾向的には若年層男性と変わらないが、やはり全体的に男性よりも使用の割合が落ちている。特に同性に対する場合は、好感、嫌悪を問わず男性の場合よりも圧倒的にパーセンテージが落ちており、ここでも二人称として「自分」を用いるのは、男性のほうが多いということが読み取れる。

<老年層男性>

2 の好感を持っている異性に対しては、若年層男性・女性と逆の結果が出た。自然会話上で、好感を持っている女性に対しては、「自分」という単語を使うのは逆に失礼になり、あえて使わないという声を聞くことができた。

<老年層女性>

老年層男性の傾向と似ている。しかし、4 と 5 の嫌悪感を抱いている人に対しては、老

⁷ これは、コンサルタントの自然会話を筆者がメモしていたことによる。

年層の男性よりも使用割合が少なくなっている。

5.4 調査の考察

(D)の怒りを含んだ感情をもつての発言の箇所が予想より少なかったことを除いては、ほぼ仮説どおりの結果となった。また、今回の調査において、使用傾向の強い順番に並べると、以下の関係図ができる。

老年層女性<老年層男性<若年層女性<若年層男性

図 1: 今回の調査における「自分」の使用傾向の強さ

6. 終わりに

先行研究、コンサルタントへの調査を通し、二人称としての「自分」の使用については、
<1>社会的身分（目上<同等以下）
<2>聞き手との親密度（嫌悪<親密）
<3>世代差（老年層<若年層）
<4>男女差（女性<男性）
の4つの要素が大きく関係しているが、調査全体を総合的に見て、<1>から順にその要素が強いと言えるということがわかった。特に、<1>社会的身分に関しては、全層で大半の人が目上に対しての使用は不可としていることから、聞き手が社会的に同等以下であるということが、「自分」の使用の前提条件をなっているということがわかる。<3>世代差と<4>男女差に関しては、郡（1997）の先行研究からも読み取れ、また今回の調査でその内容を確認することができた。また、<4>男女差よりも<3>世代差のほうが「自分」の使用について大きな影響を与えるということが判明した。郡（1997）で示された、聞き手と話し手との関係について、どんな関係の中であれば使用が多くなるのか、また少なくなるのかということも少しでも明らかにできた。反省点としては、今回はコンサルタント不足のため中年層の調査ができず、この世代については全くデータを見ることができなかった。今後の課題としていきたい。末尾ながら、今回調査にご協力いただいたコンサルタントの方々に、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 井上史雄・鎌水兼貴編（2002）『辞典 新しい日本語』90 東京：東洋書林
郡史郎・平山輝男編（1997）『日本の言葉シリーズ 27 大阪府の言葉』61,23 東京:明治書院
尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』（上巻）1107 東京：小学館
日本国語大辞典第二版第六巻編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』（第二版第六巻）985-986 東京:小学館
村崎恭子（1975）「「自分」という語について」『日本語学校論集』（2号）72-84 東京外国語大学